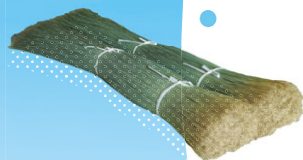




3世代でつなぐ

担い手 経営体 事例集

親子間の円滑な経営継承で
地域を担う“担い手農家像”



CONTENTS

はじめに 02

担い手
経営体事例 **01** 針馬家 | 県南(球磨) | 03

担い手
経営体事例 **02** 清田家 | 県南(八代) | 05

担い手
経営体事例 **03** 株式会社 洞田貫牧場 | 県北(阿蘇) | 07

担い手
経営体事例 **04** 小川果樹園 | 県南(天草) | 09

担い手
経営体事例 **05** 村上家 | 県央(上益城) | 11

くまもとの農林水産業2020抜粋 熊本県における農業の担い手の動向 13

はじめに

本県農業は全国有数の食料生産供給基地として重要な役割を担うとともに、環境保全や水資源のかん養などの多面的機能を有し、また、地域社会の維持・発展など、県民の生活安定に大きく寄与しています。

また、全国に先駆けて取り組んだ農地集積と広域農場の取組み等の担い手育成、アジア圏を中心とした県産農産物の海外輸出等施策の積極的な取り組みにより、「稼げる農業」の実現に向けて着実に実績を上げています。

一方、後継者の減少や高齢化の進展等により農業就業人口や基幹的農業従事者の減少傾向に歯止めがかからない状況となっています。

このような中、親元就農者数(新規学卒、Uターン)も年々減少傾向を示しており、熊本県認定農業者連絡会議が令和元年度(2019年度)に実施した「認定農業者の実態調査」でも、「経営主として営農継続可能年数が10年未満」が49%、「後継者がいない」が54%となっているところです。

このように将来的に営農を継続的に継承していく後継者がいないままリタイアしていく農業経営の中には、優れた経営が多く含まれており、これらの経営が散逸していくことは、経済的な損失だけでなく、本県の農業を支える産地や地域農業の維持・発展にも大きな課題となっています。

本県では、これらの課題解決を図るため、関係機関や団体等との連携のもと、令和2年(2020年)10月より本県における農業経営継承システムの構築と円滑な農業経営継承を推進することを目的とした「くまもと農業の継承支援事業」に取り組んでいます。この本で今回、親子間・親族間継承の事例を収集するとともに優良事例集としてとりまとめ、親子間・親族間の円滑な経営継承に繋げていくため「親元就農に係る優良事例集」を取りまとめました。

本県の担い手育成及び円滑な経営継承の機運醸成に向けて、関係者の参考の一助として本冊子をご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、本冊子の刊行にあたり、優良事例として掲載させていただきました農業者の方々並びに関係者の皆様方に対し厚く御礼申し上げます。

令和3年3月

一般社団法人熊本県農業会議

会長 森日出輝

代々、手書きで残してきた 「農業日誌」でつなぐ 歴史ある農家の継承

就農支援資金（無利子資金）を活用し 新しい作物を展開

多良木町で先祖代々農家を営んでいる針馬家。江戸時代には農耕馬に鍼治療を施す馬医師もしていたことから、相良のお殿様から「針馬」の姓を頂いた由緒があり、そこから充則さんで7代目に当たる珍しい名字を持つ、歴史ある農家です。

父、力盛さんの代では、主にキュウリと水稻を育てていました。長男として生まれた充則さんは、「農家は当然、長男が継ぐもの」と球磨農業高校（現：南稜高校）へ進学。「当時は球磨地方にプリンスメロンが取り入れられ始めた時期で、私も高校でメロンの栽培を学びました」（充則さん）。S56年、卒業と

同時に親元就農し、就農支援資金（無利子資金）を活用して、新たにプリンスメロンの栽培を20aからスタート。そして、充則さんが結婚した27歳で、主な実務の継承が行われました。父・力盛さんが65歳で農業者年金をもらい始める年を区切りに、経営代表者名義など全てを充則さんが引き継ぎました（当時38歳）。現在アンデスメロンにシフトし、60aの土地で栽培しています。

その長男・伸弥さんも、「長男が継ぐものだ」と子どもの頃から祖父に教られていました。「それが当たり前だと思っていたので、就農に抵抗を感じることはありませんでした」（伸弥さん）。

地元の進学校・人吉高校卒業後は農業大学校へ進学。作物についてしっかり学び、卒業後に親元就農しました。「私の時と同じように、息子が結婚して仕事への責任を持ち、私が65歳で年金をもらい始める歳に代替わりができればと思っています」（充則さん）。



経営体1：県南（球磨）

はりま
針馬家

農業経営に関わる家族構成：

父 力盛さん（85歳）、母 安子さん（80歳）、【現経営者】充則さん（58歳）、妻 育代さん（54歳）、【継承予定者】長男 伸弥さん（25歳）

● 所在：球磨郡多良木町 ● 経営作物・規模：メロン0.6ha、キュウリ0.2ha、水稻3haほか



代々受け継いでいる 農業日誌が 経営継承の“虎の巻”

次の代へと経営継承するにあたり、針馬家には大切な道具があります。それは「農業日誌」です。父・力盛さんもその父から引き継いだというこの日誌。毎日欠かさず、天気と農作業の記録、時にはライフイベントを記入しており、3年分の同じ週の内容が同ページ内で確認できる仕様です。父の急逝により30代で家を継いだという父・力盛さんは、「父が残した日誌だけが頼りだった」と語る。それから三世代、皆、毎日

必ずこの日誌をつけるのが伝統となっています。あえて手書きで残すのが、針馬家の流儀。「この日誌を見れば、昨年同時期の作業や気候をすぐに調べられて農作業に生かれますし、引き継ぎにも便利。この記録は、我が家の財産なんです」（充則さん）。

また、伸弥さんに向けては一から作業を教え込むのではなく、「背中で教える」姿勢に徹しているという充則さん。「本人に欲が出れば、積極的に尋ねて

きたり、日誌で過去の作物を研究したりと行動にも表れるはず」と、本人の気持ちを大事にしています。



代々受け継いでいる「農業日誌」

新たな人脈や知識を 生かして、より良い経営を

25歳となった伸弥さんは、継承に向けて、「父や祖父と一緒に作業をしながらノウハウを学んでいる最中です」と語ります。一方で、農業大学校時代の恩師や仲間、若手農家が集まる「4Hクラブ」やメロン農家の若手後継者が集まる

「秀園者」など、様々な人脈を生かして情報交換を行っています。2021年1月に開かれた球磨地方青年農業者会議では、アンデスメロンの交配に関するプロジェクト発表で秀賞を取り、県会議のプロジェクト発表でも秀賞を取りました。また、イラスト入りメロンなど、栽培方法や新商品、販路の研究に余念がありません。「家族経営である以上、今後は規模拡大よりも、反収を上げる経営が必要。息

子には、自分の手で築いた人脈や知識を生かし、この難しい時代の経営に取り組んでいって欲しいですね」（充則さん）。



経営継承の POINT!

●就農支援資金で新しい作物に挑戦

時代に合った新しい作物に挑戦することで、後継者の主体性向上や規模拡大、経営の効率化を図りながら継承することができました。

●記録を残すことでハウツーを確実に伝える

毎日欠かさずつけた農業日誌のおかげで、先代だけではなく数世代前の情報も共有できます。口伝だけでは難しい技術の継承にもつながります。

需要が減る中でも「いぐさ」を、
継承後も続けたいと決意。
時代に合わせた展開を模索!

子どもの頃の手伝いの思い出が 農家を継ぐことの後押しに

八代市鏡町で先祖代々農業を営んでいるという清田家。いぐさを始めたのは父・義成さんの代からです。当時は「青いダイヤ」ともてはやされるほど、八代一帯で盛んだったいぐさ栽培。親元就農していた主税(ちから)さんが父から継承したのは、32歳で結婚をした直後でした。「嫁をもらって一人前、という時代。私が跡を継ぐのは既定路線でしたし、栽培や畳表作りの作業方法などはずっと父の元で学んでいたの、特に家族会議や引き継ぎはありませんでした。ある日突然『今日からよろしく』と通帳や書類関係を渡されたといった感じでしたね(笑)」。

3人の男子に恵まれた主税さんですが、実は息子たちに跡を継がせるつもりはなかったと言う。「年々、いぐさの需要も減っていて、大変な思いはさせたくなかった。全く違う仕事で身を立てて欲しいと思っていました」。長男・一生(いっせい)さんもその思いを知ってか当初は農家を継ぐつもりはなく、高校は工業系に進み、東京の一般企業に就職。しかし、4年経ったときに熊本地震がおきました。苦難を迎える故郷のために働くべきだと帰熊を決めた一生さんは、そのまま親元就農の道を選びます。「子どもの頃、いぐさ刈りや田んぼを手伝っていたときのキラキラした

思い出がずっと残っていて、熊本に戻る=親の跡を継ぐと決断する決め手になりました。父は最初は『大変だぞ』と歓迎していませんでしたが、子どもの頃に田畑で感じる感動体験が、後々のスムーズな継承にもつながるかもしれませんね」(一生さん)。



経営体2: 県南(八代) 清田家

農業経営に関わる家族構成:

父 義成さん(83歳)、母 カネコさん(83歳)、【現経営者】主税(ちから)さん(60歳)、妻 美代子さん(53歳)、【継承予定者】長男 一生さん(27歳)

●所在: 八代市鏡町 ●経営作物・規模: いぐさ1.4ha、水稻2ha ●家族以外の労働力: 繁忙期にパート雇用



30歳での継承を 目指し農作業以外の 学びも広げる



「私が継承した時期、周囲では規模を拡大する農家もありましたが、私は規模を保ちつつ質を高めて付加価値をつけることに尽力しました」と事業展開を固めた主税さん。現在は、その主税さんから一生さんへの継承に向けて準備中。27歳の一生さんは「30歳での経営継承」を目指しています。「早く息子に譲って遊びたいですね(笑)」と主税さんも早い継承に前向きです。「熊本に帰ってきた当初は草刈りも危

なっかしかったけど、今は任せられる域に達している。もう一息です」。

一方で一生さんは、農作業以外の学びも広げている。「我が家では、お金と書類の管理は母が行っていますが、私は農作業だけではなくお金の管理も学んでいます。男は仕事、女は事務ではなく、その両面から我が家の経営を見渡せるような力をつけるべきだと考えています。」(一生さん)。加えて、若手農家の集まり「4Hクラブ」に所属し、

研修や交流会、プレゼン発表など様々な活動を行っています。30歳での継承も、この会で決断。新時代の農業に向けて、積極的に準備を進めています。



新たな管理体制を築くための学び

これからいぐさは面白くなる マルチな農家として活躍を

いぐさ農家に厳しい時代と言われ、周りの人からは作物転換をアドバイスされたという一生さん。「確かに、いぐさは機械化できない作業が多く、もっと効率的な作物があるかもしれない。でも、私はいぐさをやるために帰ってきた

ので、変えるつもりはないんです」と断言します。「我が家の伝統は踏襲しつつ、現代のニーズに応える商品も増やしていきたい」と、今はその人脈を広げつつあります。農作業・経理・営業をマルチにこなせる新しい農家像の構築に取り組んでいます。その姿を見る主税さんも「量の需要の減少以上に、いぐさ農家が減っている。そんな時代なので、『いぐさ』を続けることは面白い

かもしれない。若手農家ならではのアイデアで勝負して欲しい」と一生さんの継承後の活躍を待望しています。



経営継承の POINT!

●技術は背中教える

いぐさの栽培から畳表折りまで、様々な作業があるいぐさ農家。あえて教え込むことはせず、代々、一緒に作業しながら背中を見て技術を覚え、継承してきました。

●後継者同士の情報交換を活発に

4Hクラブなどで後継者同士が交流し、今の農家が抱える課題解決や時代に合った農家の形を模索。より良い継承に向け、若手農家も活発に交流活動に参加して意識を高めています。

親世代に25頭から始まった酪農も 現在は260頭規模の牧場に！ 確かな経営で次世代への継承を

稲作から酪農へと切り替え 代を経るごとに規模拡大

現経営者・優造さんの祖父の代までは稲作主体の農家だった洞田貫家。昭和50年代、父・逸雄さんの代で減反政策の進行を受け、「今後、タンパク質が日本の食料需給の柱になる」と、新たに酪農を始めました。庭先で牛25頭の規模から始め、米・高菜・酪農の三本柱で営んでいました。

洞田貫家の後継者として農業大学校に進学した優造さんは、規模拡大の夢を抱き、酪農中心に学びました。卒業後、親元就農した後は、もっと広い土地への牛舎移転・拡大の準備をスタート。平成7年の公社事業で現在 の場所に移転。「新しい牛舎の計画や

設計などは、『自分の夢に向かって頑張れ』とすべて優造に託しました」と逸雄さん。

当時、逸雄さんが農協や土地改良関係の仕事に携わっていたこともあり、経営管理は全て優造さんの担当に。逸雄さんが農業者年金を受給し始める65歳になったタイミングで、名義・権利関係も全て優造さんに継承した。

優造さんは4男1女に恵まれ、牛舎が遊び場だったという長男・雄大さんは、「高校時代に他の仕事も調べたけど、牛を飼うこと以上にしたいことがなかった」と、家業を継ぐために帯広畜産大学に進学。在学中にはJICAの活

動でパラグアイへ、卒業後は1年間、デンマークの海外研修で知見を広めた後に、親元就農した。牧場は平成30年の畜産クラスター事業で現在の規模に拡大。現在は優造さんと雄大さんが柱となって牧場を運営しています。



経営体3：県北(阿蘇)

株式会社
どうだめき
洞田貫牧場

農業経営に関わる家族構成：

父 逸雄さん(82歳)、母 武子さん(78歳)、【現経営者】優造さん(55歳)、妻 二三子さん(52歳)、【継承予定者】長男 雄大(ゆうた)さん(25歳)

●所在：阿蘇市 ●経営作物・規模：酪農(成牛260頭、育成105頭、北海道預託75頭)、採草地45ha、WCS 45ha ●家族以外の労働力：従業員3名、外国人技能実習生3名

株の贈与に乳牛の個体管理 長男への継承に 向けて準備は着実！



平成22年、従業員の雇用や外国人技能実習生の受入で社会保険が必要となったタイミングで法人化した洞田貫家。平成31年に就農した雄大さんは、数ヵ月は従業員として給料制でしたが、他の従業員とは勤務体制が異なることから、報酬制の役員待遇に見直した。さらに将来の継承に向けて、雄大さんへの株の贈与も少しずつ進める準備を行っている。「私が65歳になる10年間で少しずつ進めれば、最

終的には持ち株1～2割に達します。段階的に条件を整えて、全ての経営を移譲していければ、というのが現段階での計画ですね」(優造さん)。

現在は、乳牛の個体管理や労務管理は雄大さんに任せています。「自分が仕事がわからないと、人も使えない。よりロスの少ない運営を身に付けて欲しいですね。そして、長期安定雇用ができる方法を模索していきたい。実際の作業に加えて、経営・労務管理と全

ての体制が整った状態で息子に移譲できるのが理想的だと思います」という優造さん。そのために、確固とした経営基盤の土台固めを行っています。



海外研修の経験を生かし 次世代の挑戦に期待

今は父と共に働きながら、仕事をしっかり覚える日々だという雄大さん。「デンマークの経営継承は、親から子への贈与では多額の贈与税がかかるため、贈与の例は少なく、子が親の牧場を買う仕組みが多い。自力で牧場を買って拡大させる

現地の若手農家に刺激を受けました。海外での経験を生かし、自社のブランド力を高める経営にも挑戦したいです」と将来の展望を語ります。そんな息子を「自由に挑戦させたい」と見守る優造さん。「より良い親子の経営継承のコツは、口を出しすぎず、子どもにまかせることだと思います。私も父から自由にさせてもらえました。成功だけでなく失敗もありますが、ギリギリまで我慢することが大事。息子が海外

経験など生かして何かに挑戦できるよう、その土台となる優良な経営に取り組むのが、継承への私の務めです。」と微笑む。



経営継承の POINT！

●法人化で基盤を固め株の贈与も計画的に！

牧場経営の基盤を固めつつ、着実に権利を移譲するため、10年計画で株の贈与を計画的に進めています。

●牛舎の運営・労務管理を任せ経営を早くから学ばせる

機械化が進んだ牛舎の管理や労務管理を任せることで、経営感覚の向上につなげています。

●親は口を出しすぎず自由な挑戦を見守る

子どもの自主性を尊重し、時代に合った新しい農業に対応できるよう見守るのが鉄則。

積極的な農地改良で 機械化・効率化を進めて 新時代に対応した農園整備を

経営体4: 県南(天草)

小川果樹園

農業経営に関わる家族構成:

父 博幸さん(72歳)、母 よしみさん(72歳)、
【現経営者】夏生(なつお)さん(46歳)、妻 哲子(あきこ)さん(46歳)、
【継承予定者】長男 海都(かいと)さん(23歳・結婚し住居は別になる予定)

●所在: 天草市 ●経営作物・規模: 果樹(加温不知火20a、無加温露地不知火161a、河内晩柑150a)※現在、70aを追加で造成中 ●家族以外の労働力: なし

開拓団として入った土地 柑橘栽培で拡大経営

小川家の農業のルーツは、満州から引き揚げてきた開拓団です。満鉄勤めだった現経営者・夏生さんの祖父が、戦後に裸一貫で天草市の山あいの土地に入植。慣れない鋤を手に山を開拓し、イモや麦などの食料を作りはじめた事が始まり。海が近い南西向きの山あいは柑橘系に適していたことから、父・博幸さんの代に30aの土地で甘夏栽培を始めました。

そんな小川家を継ぐべく、県立農業大学校で柑橘栽培を学んだ夏生さん。「長男ですし、父の後を継ぐことは決めていましたが、社会勉強のために一旦は地元企業に就職しました。数

年だけのつもりでしたが、中々辞められず7年働くことになりました(笑)」(夏生さん)。その後、加温ハウス団地の計画が立ち上がったことをきっかけに親元就農。新たにハウス栽培を始め、周辺の農地を借入し少しずつ広げ、不知火と河内晩柑の栽培を拡大し、現在は約3haにまで広がっています。博幸さんから夏生さんへの引き継ぎは日々の業務の中で自然に行われ、博幸さんが65歳になった年に資産を引き継ぎ、夏生さんへ継承しました。

その長男・海都さんも夏生さん同様、後継ぎとして県立農業大学校に進学。卒業後、父と同じように社会経

験を積む選択肢もありましたが、「園地が拡大して人手が欲しかったから、すぐに就農してもらいました。『おまえのために70aの畑を準備しとるぞ』と(笑)」と夏生さん。現在、海都さんは、祖父母や父から様々な技術継承を受けています。



新しい時代の技術を取り入れ 最新の環境を継承したい



技術継承は「柑橘栽培は、ハウスの管理には相応の技術が必要ですが、露地栽培はそんなに複雑な技術はないので、体で覚えてもらうだけです」と、博幸さんと夏生さんは声を揃えます。その上で、さらに安定して効率的に栽培・収穫ができるよう、規模拡大に際しても工夫をしています。最近は耕作放棄地が増えてきていることもあり、条件の悪い山あいで栽培をやめ、代わりに栽培しやすい土地を借りて畑を造

成。その際、機械が入れるよう樹の列の間を広く取り、剪定や収穫がしやすいようあえて樹高を低く保つようになっています。いずれも一見、反収が下がりそうですが、作業の機械化・効率化ができ、結果的に収穫量も品質も上げることができるといいます。「家族経営だと規模拡大にも限りがあります。新しい時代の技術を積極的に取り入れ、私の代でできる限り農地利用の効率化を進めることが、息子に譲るまでにで

きる準備の1つです」と夏生さん。自身が農業者年金を受け取りはじめる65歳を目処に全てを継承できるよう、準備を進めています。



数十年来の顧客が財産 ネット活用で拡大に期待

小川家の経営で特徴的なのが、個人への直送による収益が多いということ。しかも、父・博幸さんの代から口コミで広がった、電話による受注です。減農薬で鶏糞の肥料を使ったこだわりの味に、何十年も注文してくれる顧客

も多く、「このたくさんのお客様が財産」と博幸さんは胸を張ります。「このお客様を大切に引き継ぎながら、時代に乗っていかないといけない。ホームページやネット通販、SNSでの情報発信にも取り組みたいです」と意気込む海都さんは、新婚1年目。今後、奥様と一緒に果樹園を大きくしてほしいと夏生さんは望みます。「若い世代の考え方を尊重し、時代に合った農法を見

守るのが、スムーズな継承のコツだと思います。それが、さらなる経営の向上にもつながるはずです」(夏生さん)。



経営継承の POINT!

●農地利用の効率化を図り継承しやすい環境をつくる

子世代がより効率的に農業に携われるよう、機械化と作業しやすい農地整備を徹底しています。

●長年の顧客を引き継ぎつつネットでの販路拡大を任せる

長年直送販売してきたノウハウを生かしながらも、ネット通販などの新しい販路の開拓を子世代に委ねています。

●次世代の新しい農法や考え方を尊重すべし

技術は体で覚えてもらいながら、時代に合った新しい考え方は尊重することが大切です。

地域農業の未来を見据えた取り組み 法人化し、経営を安定させて 次世代への継承を目指す

父とは別に農地を借り 新規に園芸作物を立ち上げ

嘉島町で米、麦、大豆の専業農家である村上家ですが、もとは父・盛行さんが左官業の傍らで稲作との兼業農家が始まりです。昭和48年にこの地域の土地改良事業が行われ、30aの農地で米・麦の栽培を行っていました。

卓也さんは熊本農業高校へ進学。日本はバブル時代。「父の後を継ぐというよりも、何か手に職を付けたい、という思いでした」と振り返ります。

卒業後、進路を検討していたとき、中学の頃の同級生が新規就農しメロン栽培で頑張っている話を聞きました。「会社員は決まった給料しかもらえないけど、農家は頑張っただけ稼げる。

そんな話を聞いて、やりがいを感じました」。

そこで、卓也さんは父とは別に自分名義で新たに農地を借り、最初は20aの農地で施設園芸(メロン)を始めました。しかし平成3年の水害でイチゴに転換します。その後、熊本地震をきっかけに、「手間がかかりリスクのある施設園芸より、土地利用型に」と考えるようになり、当時、盛行さんが手がけた水田は8haまで広がっていたこともあり、そこをベースに米・麦・大豆へと切り替えました。

一方で、祐太さんは地元の普通高校へ進学。後継ぎを強くは求められて

いませんでしたが、「将来を考えたとき、子どもの頃から慣れ親しんできた農業がいいと思った」と、卒業後は親元就農することを決意しました。卓也さんも「後を継いでくれるなら、基盤をしっかり整えてあげたい」と嬉しく感じたそうです。



経営体5: 県央(上益城)

村上家

農業経営に関わる家族構成:
父 盛行さん(84歳)、【現経営者】卓也さん(54歳)、
【継承予定者】長男 祐太さん(24歳)

●所在: 嘉島町 ●経営作物・規模: 米・麦・大豆 12ha ●家族以外の労働力: なし



耕作放棄地も積極的に受け入れ 法人化・安定経営での継承を

時代の流れや自然災害の影響によって、臨機応変に作物や経営を変えてきた村上家。土地利用型農業に切り替えた後は少しずつ土地を広げ、現在は12haの規模になりました。

村上家周辺では専業農家は徐々に減り、「うちの農地も借りて欲しい」と任される農地が増えてきたものです。耕作放棄地になるよりはと借り受け、米・麦・大豆を栽培しています。「12haはしっかり稼げて手も回るちょうどい

地域の農家後継者をサポート 地区を守る取り組みも受け継ぐ

法人化を目指すもう一つの目的が、雇用の創出です。現在、この地区で専業農家は村上家だけですが、兼業農家は多くあります。その子ども達が将来、農業に携わりたいと思ったとき、受け皿となるための準備です。「我が家の

い規模ですが、息子が継いでくれるなら、15〜20haくらいまでは広げたい」と卓也さん。さらに、法人化を検討して経営体制も整えたいと考えています。「個人と法人では、経営の考え方が変わり、さらに利益も増やせるはず」。

祐太さんが普通作物で経営を安定させて引き継ぐことは、将来、自分の様に何か新しいことに挑戦する土台になると期待。「60歳で息子に譲り、その後はハウスで大好きな園芸作物

を少し育てるのが目標」と卓也さん。今は祐太さんと二人で働きながら、さまざまな技術を教え込んでいるところ



を図ることができます。町の農業の未来を見据え、地域を守る気持ちもまた、父から子へと受け継がれつつあります。



経営継承の POINT!

●将来の継承に向け法人化・規模拡大を検討

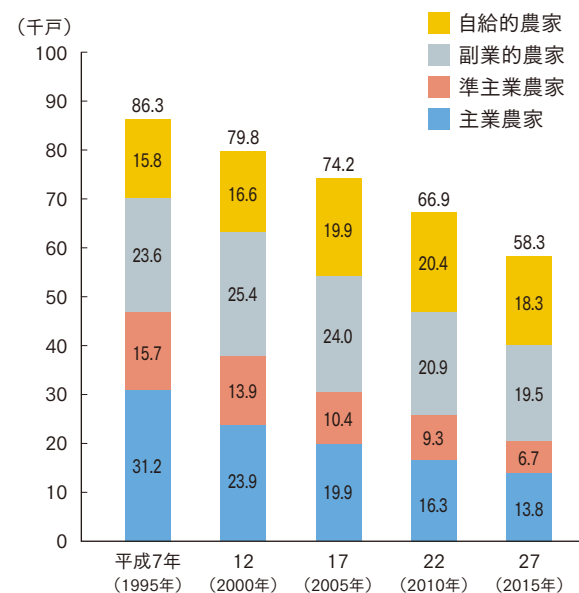
普通作物のみでもより安定的な経営が行えるよう、法人化し、経営規模を拡大した上での継承を目指しています。

●地域の農業を守ることも未来への投資に

法人化によって農業に携わりたい人材の雇用を創出したり、地域の兼業農家の後継者育成をサポート。嘉島町の農業と農地の未来を守る取り組みで、村上家だけでなく地域ぐるみでの発展を目指しています。

熊本県における農業担い手の動向

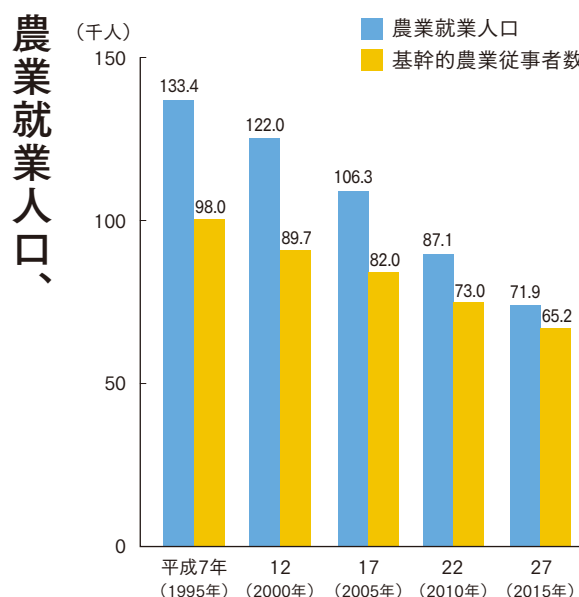
主副業別農家数



(資料)農林水産省「農林業センサス」、「農業構造動態調査」

総農家数は全国的に減少しており、熊本県においても平成27年(2015年)は平成22年(2010年)より8,455戸減少し、58,414戸となっています。

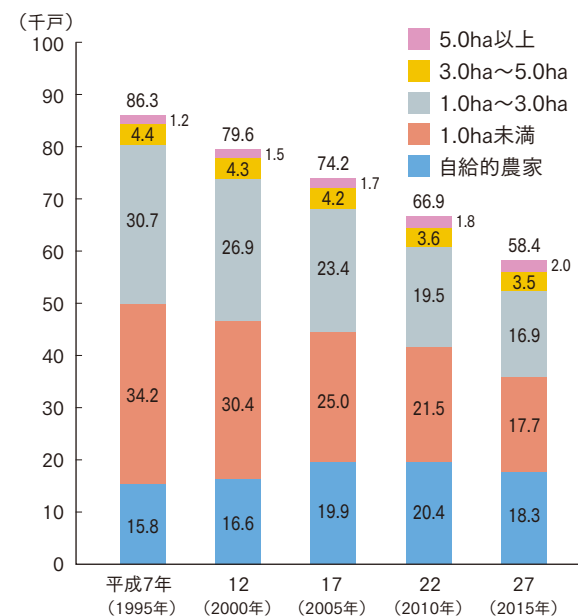
基幹的農業従事者数の推移



(資料)農林水産省「農林業センサス」、「農業構造動態調査」

農業就業人口は、後継者の減少や高齢化の進展によって減少傾向にあり、平成27年(2015年)には71,900人となっています。また、基幹的農業従事者数についても減少傾向にあり、平成27年(2015年)には65,209人となっています。

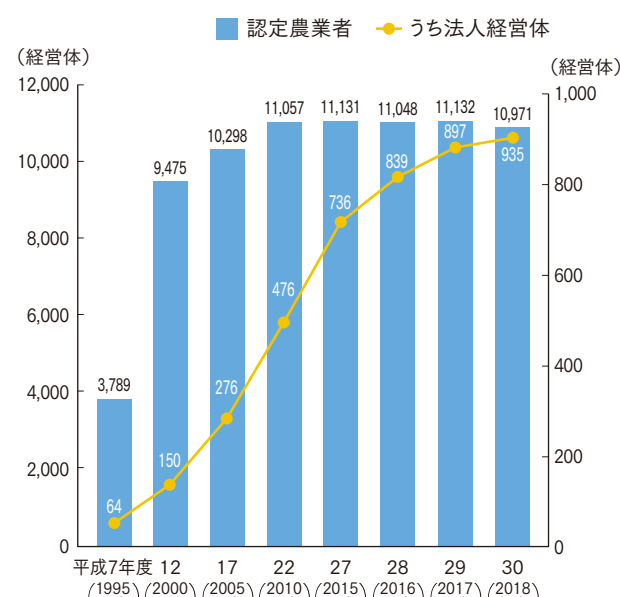
経営耕地規模別農家数



(資料)農林水産省「農林業センサス」、「農業構造動態調査」

農家数は減少していますが、経営耕地規模別に見ると、5ha以上の農家は増加するなど、経営の大規模化は進んでいます。

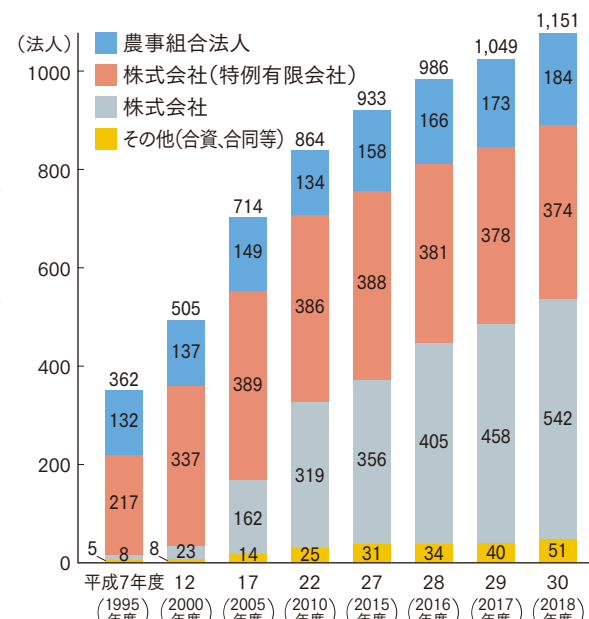
認定農業者の推移



(資料)県農林水産部調べ

認定農業者数は、平成14年度(2002年度)に1万経営体を超え、その後は横ばい状態が続いています。平成30年度(2018年度)末は10,971経営体で、全国第3位の認定数となっています。

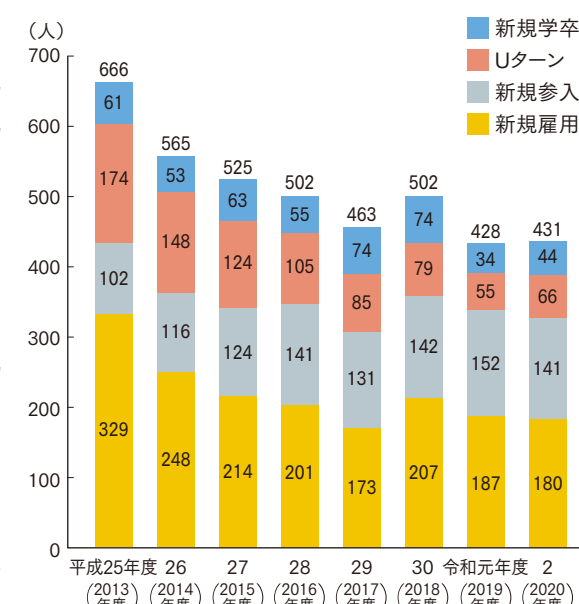
農業法人の推移



(資料)県農林水産部調べ

経営の多角化や安定化を図る有効な手段として法人化を推進してきた結果、年々増加し、平成30年度(2018年度)末で1,151法人まで増加しています。

新規就農者・雇用就農者の推移



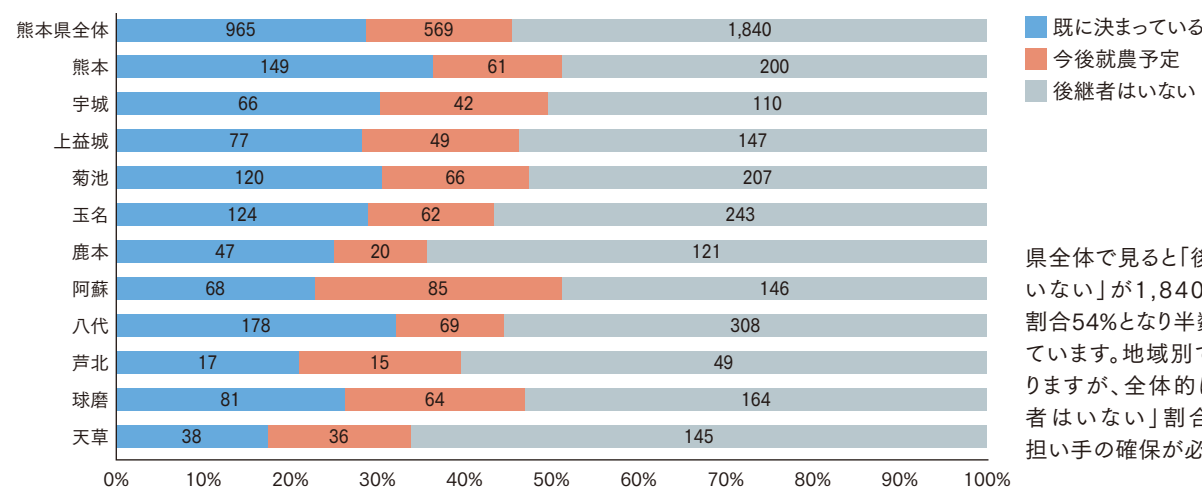
(資料)県農林水産部、県農業会議「青年農業者実態補充調査」

令和2年度(2020年度)の新規就農者・雇用就農者数(新規学卒、Uターン、新規参入、新規雇用)は431人となり、前年より3人増加しました。

熊本県認定農業者実態調査結果(経営継承)から抜粋

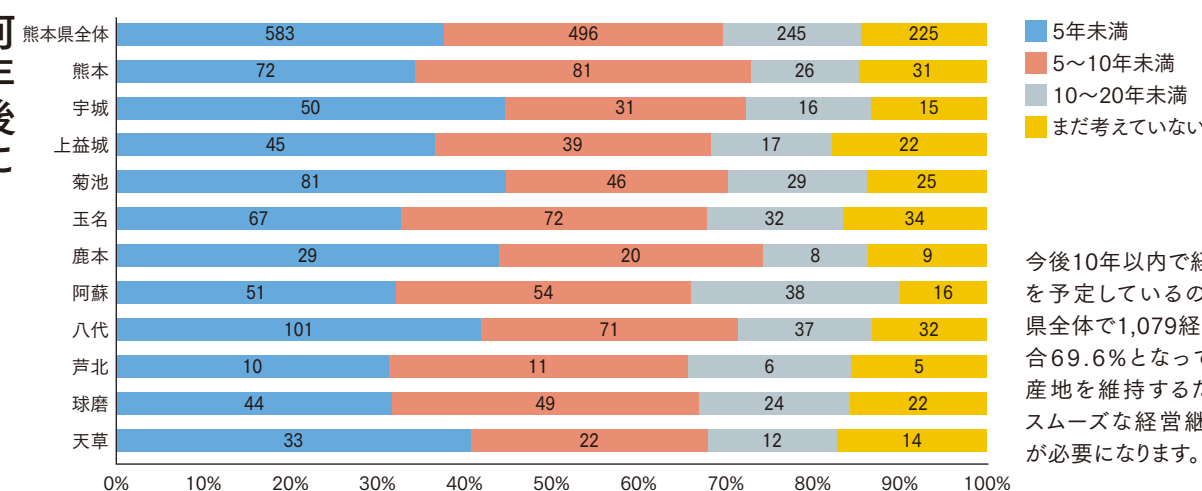
(令和元年度熊本県認定農業者実態調査アンケート結果)

後継者の現状



県全体で見ると「後継者はいない」が1,840経営体、割合54%となり半数を超えています。地域別でも異なりますが、全体的に「後継者はいない」割合は高く、担い手の確保が必要です。

何年後に経営移譲を考えているか



今後10年以内で経営移譲を予定しているのが熊本県全体で1,079経営体、割合69.6%となっています。産地を維持するためにも、スムーズな経営継承支援が必要になります。

熊本県では、未来につながる
魅力あふれる「くまもと農業」の確立のため
円滑な経営継承による
担い手の確保に向けた支援を
行っています。

発 行

一般社団法人 熊本県農業会議

熊本市中央区水前寺6丁目18-1 県庁本館9階

TEL.096-384-3333 FAX.096-385-1468

E-mail 43ninaite@nca.or.jp